



日本語上達の決め手は受身形の使い方にある

にほんごじょうたつ き て うけみけい つか かた

吳 善花
オ ソンファ

韓国にいた時に、語学校で一年間韓国人に英語を教えた体験がある。日本に来てから語学教室を設けて、数年間韓国人に日本語を教え、日本人に韓国語を教えた体験がある。また日本の大学で三年間、日本人に韓国語を教えた体験がある。

その中で、韓国人に日本語を教えた体験では、日本で働く韓国人が生徒だったので、単に語学の習得ということにとどまらず、日本生活に馴染んでいけることを大きな目的として教えた。そこで私が最大のテーマとしたのは、異文化間に生じる行き違いの克服だった。習慣的な制度のあり方、倫理観や価値観、物事の発想の仕方、美意識のあり方などの違いが、日本語を理解するうえで大きな障害となることを、私自身が痛切に感じさせられたからである。

たとえば、日本人の大きな特徴の一つに、物事に対して受け身の立場におとうとする傾向がとても強いことがあげられる。自己主張をぶつけ合ってお互いを知り合おうとするよりも、できるだけ共通点を探して協調し合おうとする国民性によるものだが、それが「主体性のなさ」と映ってしまい、相手が何を考えている

のかが、なかなかつかめないのである。それに対して、韓国人はいいたいことをどんどん主張するタイプなので、そこにいろいろな誤解が生じて、関係がうまくとれないことが、たくさん出てくることになる。

それで私は、日常会話である程度意味が通じるようになった段階で、受身形(受動態)の使い方を徹底して身につけさせるようにした。日本語ほど受身形を多用する言葉は他にないし、これをこなすことは、日本人の感受性にマッチした会話の上達には欠かすことができない。

「押す」「蹴る」「打つ」などの他動詞だけではなく、「座る」「寝る」「言う」「喜ぶ」「思う」など、自動詞でも受身形をつくるのが日本語だ。たとえば「あなたが死ぬと困る」とはまず使わない。「あなたに死なれると困る」と受身形で使うのである。日本人の感覚からすると、前者の使い方では突き放された冷たさを感じられ、後者の使い方では「本当に私を大事に思っていてくれているんだな」という温かさが感じられている。

能動態ばかりの使用は、日本人に「きつい性格だ」という印象を与える。日本人との関係をよりスムーズなものとするためには、受身形の習得は驚くほど効果をあげるものである。(エッセイスト)